OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞ シャンタル・ジャケ著『スピノザにおける活動力の表現』Jaquet, Chantal : Les expressions de la puissance d'agir chez Spinoza, Publications de la Sorbonne, 2005.
Author(s)	小田, 裕二朗
Citation	メタフュシカ. 2013, 44, p. 121-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26544
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

《文献紹介》

シャンタル・ジャケ著

『スピノザにおける活動力の表現』

Jaquet, Chantal: *Les expressions de la puissance d'agir chez Spinoza*, Publications de la Sorbonne, 2005.

小田裕二朗

本書はフランスのスピノザ研究者シャンタル･ジャケ[1]の論文集であり､第一部｢精神の永遠性｣､第二部「虚偽の有用性」､第三部「スピノザとその時代」､第四部「身体と感情」とテーマごとに四部に分けられている。タイトルにもある活動力 puissance d'agir は、スピノザの『エチカ』を読んだことがある人であれば誰もが覚えのある重要な用語だが、実際に活動力に関係している論文はそれほど多くなく、ひとつひとつが独立したトピックを持っておりそれぞれ個別に論じられている。

本稿では紙幅の都合上そのすべてを紹介するわけにはいかないが、第四部の最後に収められている三つの章を取り上げて紹介する。｢『エチカ』における自己愛の出現｣､｢死の恐れ｣､｢隠された強さ｣､これらの章はタイトルを見てもわかる通り倫理的な内容に関わっている。この三つの章を取り上げたのはタイトルに含まれている活動力というテーマについてそれぞれの着眼点から論じたものであり、この三つは互いに関連しあっており活動力に関するひとつのまとまった論考となっているからである。ジャケ自身も、この最後の三つの章によって人間の力能の最小限と最大限、すなわち死の恐れ peur de mort によって表される人間の有限性から、勇気 fermeté と寛仁 générosité を通して人間の強さ fortitude までが明らかにされると述べている（p.215）。実際、｢『エチカ』における自己愛の出現」では、『短論文』などの初期著作においては自身に固有の力能を

[1] 著者のシャンタル・ジャケ Chantal Jaquet は現在パリ第一大学の教授であり現代のフランスにおけるスピノザ研究を牽引している一人である。デカルト研究者のジャン＝マリー・ベイサードの指導のもと、博士論文 *Sub specie aeternitatis : étude des concepts de temps, durée et éternité chez Spinoza* を執筆している。著書は本書の他に *L'unité du corps et de l'esprit chez Spinoza*(2004) などがあり、スピノザ研究のほかにも *Bacon et la promotion des saviors*(2010) というベーコンについての研究書も著している。また、ピエール＝フランソワ・モローとともに *Spinoza transalpine : Les interprétations actuelles en Italie*(2012) の編纂に携わるなどして、国際的にも活躍している。

持つことのできなかった人間が『エチカ』においてコナトゥス論が導入されることによってそういった力能を持ち、またそこから愛の対象としての自己が可能となるということが明らかにされる。また、「死の恐れ」ではスピノザは精神の永遠性を語る一方で、なぜ『エチカ』においては自由な人間であっても死の恐れは完全に除去されず残りつづけるのかが問題となっており、人間の何が永遠であり何が有限であるのかが示される。そして最後の「隠された強さ」では人間の力能がどこまで及ぶのかが考察されている。

第四部 4 章 『エチカ』における自己愛の出現

本章で問題となるのは『知性改善論』や『神･人間及び人間の幸福に関する短論文』（以下『短論文』）などの初期著作において、スピノザは愛について詳細に論じているにも関わらず「自愛 l'amour-propre, philautia」と「自己愛 l'amour de soi, amor sui」についてまったく扱われていないこと､および成熟したスピノザの著作である『エチカ』におけるそれら概念の登場である｡『エチカ』において自愛は第三部命題 55 備考において、「自己満足 satisfaction de soi-même, acquiescentia in se ipso」とともに、「我々自身の観想から生じる喜び」と定義されて現れる。自己愛は、これもまた自己満足とともに感情の定義 28 において、「高慢とは自身について正当以上に感ずるように人間を変状する限りにおける自己愛あるいは自愛」という箇所に現れ、これら二つの概念は自己満足とも等置されている。

本章で扱われる問題は主に二つである。初期著作から『エチカ』まで、スピノザにおいていかなる思想的な変遷があったのか、これがまず問われる。そして次に、自愛と自己愛の概念は、第五部における精神の永遠なる力能の観想から生ずる喜びを彷彿とさせるにも関わらず、第三部で言及されてからはまったく出てこないということが問題となる。

一つ目の問題について、ジャケは初期著作から『エチカ』における人間本性の扱い方の違いに注目する。すなわちジャケによると、『知性改善論』や『短論文』における人間は、活動力を有さない弱い存在として扱われているのに対し､『エチカ』においてはコナトゥス論の導入によって、人間は自己の本質に応じて自身の存在に固執する力能を有する存在として扱われている｡そこで、自愛ないし自己愛の対象は自己の活動力であり、『知性改善論』や『短論文』などの初期著作においてスピノザは活動力についての理論はまだ形成していないが故にこの二つの概念は現れていないのである。実際、『短論文』における愛は人間の弱さの象徴であり、そこでの人間は、その本性の弱さがゆえに常に外的な事物を享受し、それと合一し、それから強化されることなしには生存することができないとされている。しかし、可滅的事物との合一は、その事物自体が弱体であるがゆえに我々の本性を少しも強化しない。従って神との合一のみが我々に存在と力能を与える。真の愛とは神への愛なのである（KV2-5）。

『短論文』では神との合一によって我々は再誕する wedergeboren と言われるが（KV2-22）、この神との合一のあとに、またはこの神の合一を通して自己を愛することもできない。なぜなら、神との合一によって人間に与えられる力能はその人間固有の力能とは言えず、神との合一のあとははっきりとした自己というものはないのである。ゆえに神との合一のあとには自己の観想も、

そこから生ずる自己愛も存在しえないとジャケは結論づける（p.269）。

上述したように、『短論文』から『エチカ』への変遷を解く鍵はコナトゥス論にある。確かに『短論文』においても、事物は自己の状態 état を維持しようとする傾向を有している（KV1-5）。しかしこれは個物自身の力能ではなく、神の摂理 providence divine に帰せられ、この摂理は、神にのみ固有であり、自然や個別的事物にある傾向を示しているだけで、むしろ慣性の法則のようなものである。事物の本質はそれによっては表現されない。それに対して『エチカ』においては、事物はその本質に応じて存在に固執する力能を持つのであり、ゆえにそこから自己への愛が可能となるのである。

次に『エチカ』第四部以降において、自愛及び自己愛への言及がなくなってしまうことについてであるが、ジャケはこれらの概念が自己満足と同義語だからであるという。愛の定義は外的原因の観念を伴った喜びであり、内的原因を伴う自己愛の喜びは正確には愛とは呼べない。そこでスピノザは第三部の命題 30 備考において、「内部の原因の観念を伴ったこの喜びを自己満足と呼ぶ」と再定義する。ジャケは、ラテン語の acquiescentia in se ipso は正しくは「自己における満足 satisfaction en soi-même」と訳すべきであるとし、この語が内在性を示しているということに注目する。スピノザは意志について、他の著作家たちの「愛する対象が不在ならばこれと結合しようとし、それが存在するならばその現在に固執しようとする欲望」とは定義せずに、「愛する対象の現前 présence のゆえに愛する当人が感ずる満足、それによって愛する当人の喜びが強化されあるいは少なくとも育まれるその満足」（E3AD6Ex）と定義する。故に自己愛は自己に対する自己の現前に結び付けられた満足であり、愛する当人は愛する対象としての自己のうちから出て行かない、そのために自己における満足なのである。スピノザは、パスカルの言う「一つの部屋にずっと安らいでとどまり続けることができない」という人間の不幸を自己における安らぎということで回避するのである。

第四部 5 章　死の恐れ

本章ではスピノザの有名な「自由な人間は死について考えることが最も少なく、彼の知恵とは死ではなく生についての省察である」という一節が考察される。ジャケが注目するのは、自由な人間は死についてまったく考えなくなるのではなく、死の可能性は残り続け、自由な人間であってもそれについて考えることはあるということである。実際、「第二種の認識および第三種の認識によって精神が多くの事物を理解すればするほど、その精神は悪である感情によって働きを受けるということがそれだけ少なく、そして死を恐れることもそれだけ少ない」（E5P38）という命題からも死の恐れに関する度合いがあることも読み取れる。ではなぜ自由な人間にとって死の恐れは、最少に留まりつつも絶対にはなくならないのだろうか。

それは、我々にとって死は悪であり続け、決して避けることのできない悪だからである。確かに、死について考えることは我々に自らの有限性を感じさせ悲しみをもたらすのに対して、生についての省察は自らの精神の永遠性を知覚させ我々の喜びを増大する。したがって自由な人間は直接的に善に赴き間接的に悪を避けるのであるから、生についての省察によって、死について考

えることなく死の恐れを回避するのである。しかしこの議論は、死は我々にとって悪でしかありえないという前提に基づいている。

ジャケによると、死は我々の身体の変状に終わりを告げるから悪なのだという。第四部命題39の証明によると、「人間身体が多くの仕方で刺激されうるようにさせるもの」は善であり、「人間身体が多くの仕方で刺激されるのに全然適さないようにさせるもの」は悪である。ここにおいて第四部定義2における「我々がある善を所有するのに妨げとなることを我々が確知するもの」という悪の定義は保たれている。つまり、死は我々がより優れた本性を享受することに対する決定的な妨げであり、最も低い完全性の度合いとして提示される。実際、「きわめて多くのことに適した身体を有する者は、その最大部分が永遠であるような精神を有する」（E5P39）のであるが、死はその永遠なる部分の増加を妨げるのである。確かに我々の精神は永遠でありうるのだが、同時に我々は必然的に自然に無限に凌駕されており、常に外部物体から滅ぼされ得るという危険に晒されている。精神の永遠性は、死を取り除いたり死に打ち勝ったりすることはできない。なぜなら精神の永遠性は死後の生存や救済ではない。我々は永遠でありかつ死ぬのである。永遠性は我々の存在のある部分、すなわち十全な観念から構成される我々の知性に関わり、死は我々の身体及び表象に関わる。したがって永遠なる部分と死すべき部分はまったく異なるために、永遠性も死も同様に必然であり、死の恐れは残り続ける。

ここからジャケは死を善きものとして考えるソクラテスや、死は何ものでもないとするストア派、死は我々と何の関係も持たないとするエピクロス派など、古代哲学の賢者とスピノザの賢者の違いを浮き彫りにする。

では結局我々は死に対してどのような態度を取ればよいのだろうか。ジャケによると死に関する十全な認識は不可能で、『エチカ』においても死については仮説的なものにとどまっているとしている。実際、第四部命題39でスピノザは、人間は死体と見なされる状態に変化してのみ死と判断されるべきいかなる理由も存しないとし、記憶喪失や小児から大人への成長をも死の一例として挙げる。しかしジャケはスピノザが記憶喪失や成長そのものが死であるとスピノザが断定していない点に注目する。死はその多様性のゆえに、また我々が悪については非十全な認識しか有しえないというのと同様に、十全な定義ができないと言うのである。

また、仮に死についての十全な認識が可能であったとしても、「善悪の真の認識は、それが真であるというだけでは、いかなる感情も抑制しえない。ただそれが感情として見られる限りにおいてのみ感情を抑制しうる」（『エチカ』第四部命題14）という命題から、何の効力も持たないということが言える。また、感情として見られる限りの死もやはり、悪の認識であり、それは「意識された限りにおける悲しみの感情にほかならない」（E4P8）。

従って、第五部の命題38のみが死に立ち向かうための効果的な武器を与えてくれる。すなわち、「精神はより多くの物を第二種及び第三種の認識において認識するに従ってそれだけ悪しき感情から働きを受けることが少なく、またそれだけ死を恐れることが少ない」。より理性及び直観知を発達させれば、より精神の存続する部分が大きくなり、より人間は神を愛し精神の真の満足を感ずる。唯一生の省察のみが、より正確に言うなら神の知的愛を引き起こす限りの知性の永遠性

のみが、死の恐れを妨げうるのであり、その恐れは取るに足らないものとなっていく。

第四部 6 章　隠された強さ

第三部の終わりにおいて初めて現れる「強さ」、これは至福へと通じ悲しみの感情を妨げる。この強さは十全に理解する限りにおける精神に結び付けられた感情から生じる能動すべてを含みこんでおり、知性を示し、すべて思惟属性に関係づけられ定義されている。従ってジャケはこの語を精神の強さ force d'âme と訳している。強さはさらに、勇気と寛仁という二つのカテゴリーに分けられる。第三部命題 49 の備考によると、勇気とは「各人が単に理性の指令のもとに自己の有を保存しようと努める欲望」であり、寛仁は「各人が単に理性の指令のもとに他の人間たちを援助しかつ彼らと友情を結ぼうとする欲望」である。第三部ではこれらは定義されるのみでこれ以上の分析はない。最後の情欲の定義の説明で寛仁と勇気については後に述べると言われている。しかし、この強さは『エチカ』全体で 5 回しか言及されておらず、勇気と寛仁についても 6 回のみである。これらは悲しみに対立させられている限りで、情念の統御に決定的な役割を果たしているのにもかかわらず、何故スピノザはこれらについて言葉が少ないのだろうか。

この問いを解くために、ジャケは強さの起源と本性について分析する。精神の強さは、「十全に認識する限りにおける精神に関係する諸感情から生ずるすべての能動」であるが、能動する限りにおける精神に関係する感情、すなわち能動感情 affects actifs はすべて喜びと欲望からなる。すなわち基本感情が欲望と喜びと悲しみであるのに対して、基本能動感情は欲望と喜びのみである。悲しみを基礎とした能動感情は存在しない。

では精神の強さ、そして勇気と寛仁はこの二つの原初的能動との関係でいかにして位置付けられるのだろうか。勇気と寛仁は明らかに欲望として定義されているが、では精神の強さはどうだろうか。ジャケは、精神の強さは基本感情でも欲望あるいは喜びから成る複合感情でもなく、すべての能動感情に関わる原理であると位置づける。すなわち精神の強さとは人間の理性的導きに関係づけられ、理性の導きに従った活動力を示している。従って、精神の強さは欲望あるいは喜びの感情から生ずるすべての人間の能動を含みこんでいるのである。こうして、たとえば誠実さは「理性の導きに従って生活する人間が他のすべての人々と友情によって結びつこうとする欲望」である限りにおいて、敬虔は「我々が理性の導きに従って生活することから生ずる善行をなそうとする欲望」である限りにおいて、強さに関係づけられる。自己満足も、理性の善き用法である限り同様である。これらは精神の強さの異なる呼称であり、それらがそれぞれ友情への理性的な欲望、善をなそうとする欲望、あるいは自己の活動力の真なる観想という個別的対象にそれぞれ適用された強さにほかならない。従って精神の強さは、その対象の関係に応じたさまざまな種を含み込む類であり、それ自体としては用いられずそれらのさまざまな種を通して表現されるために、この言葉自体はあまり出てこないとジャケは結論付ける。本章のタイトル、「隠された強さ la *Fortitude* cachée」もその意味で理解されなければならない。

次に、勇気と寛仁という言葉があまり用いられないのは、スピノザ自身が、第四部命題 73 の備考において、それらを同じ部の命題 37「徳に従う各人は自己のために求める善を他者のため

に欲するであろう」、および命題 46「理性の導きに従って生活する人はできるだけ、自分に対する他者の憎しみ、怒り、軽蔑などを逆に愛あるいは寛仁で報いる」という二つの原理に帰着させており、いちいち証明せずともその二つの教訓のみで十分だとしていることから理解される。

また、スピノザの強さや勇気と寛仁に対する言及の少なさは最終的には次の第三の理由に起因する。すなわち、それらが悲しみに対して引き起こす効果は、事物の本性の必然性についての省察によってより直接的かつ統一的に手に入れられるということである。スピノザは同じ命題 73 の備考で、命題 50 の備考を参照する。

> 「一切が神の本性の必然性から起こり、自然の永遠なる諸法則、諸規則に従って生ずることを正しく知る人は、たしかに、憎しみ、笑いあるいは軽蔑に値する何ものも見出さないであろうし、また何人をも憐れむことがないであろう。むしろ彼は人間の徳が及ぶかぎり、いわゆる正しく行いて自ら楽しむことに努力するであろう」。

従って、勇気と寛仁とは必然性の楽しき知解に他ならない。そして強さとは、我々の無力さの原因及び理性の感情に対する力能をはっきりさせることによって隷属から至福へと人間を導く知性の徳なのであると、ジャケは結論づける。

以上が本稿で取り上げた三つの論文に関する概略である。人間の活動力に注目したこれら三つの論文は『エチカ』における人間概念についての輪郭を浮き彫りにし、スピノザの倫理に新たな視座を与えることに成功している。そういう意味で本書はこれからのスピノザ研究者にとって読むべき書である。また、本稿で紹介した論文に限らず、本書全体の特徴としてあるタームや概念に注目してそれを分析するというスタイルをとっている論文が多い。『エチカ』やスピノザの他の著作のみを根拠にそれらを読み込まれており、その分その読解は緻密かつ堅実でありある種注釈書のような性格も持ち合わせている本書は、たとえば強さや愛といった概念が『エチカ』においてほかの概念とどのように繋がっているのか、また、他の著作におけるそれら概念の扱いの違いなど、スピノザ研究者にとっても新たに気づかされることが多く、大変刺激的な論考が多く収められている。また、古代哲学やスコラ哲学、デカルト主義に触れるなど、思想史的な観点からスピノザの哲学の分析を行っているため、スピノザ哲学と他の哲学との関係やあるいはその独自性などについて考える機会を読者に与えてくれる。したがって、本書はスピノザ研究者に限らず、広くさまざまな読者に読まれるべき本であると言えよう。

（おだゆうじろう　哲学哲学史・博士後期課程）